

(様式) 府立松原高等学校 「学校運営協議会」 報告書 (第3回)

日時	令和3年2月13日(土) 14:00~15:30			
出席者	運営協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	房本 晃	(福) バオバブ福祉会理事	平野 智之	校長
	菊地 栄治	早稲田大学教授	藤原 和子	教頭
	吉田 敦彦	大阪府立大学教授	木村 悠	首席・人権教育主担
	高橋 実加	本校PTA会長	伊藤 あゆ	首席・1学年代表
			山口 裕子	人権教育主担
			中川 泰輔	人権教育主担
	教職員等			
岡垣 有香 (1学年) 切山 孝二郎 (1学年) 園田 愛理 (1学年) 南岡 靖之 (2学年代表) 持田 師 (2学年) 南 玲奈 (2学年) 亀田 恵美 (3学年人担) 高橋 伸広 (3学年) 宮腰 義貴 (3学年)				
主なテーマ	今年度の方針と計画			
協議内容の概略	<p>① 学校経営計画 R2, R3 (学校長)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リスクのある時だからこそ学校の力が試された。学校教育審議会でもインクルーシブ教育のテーマでゲストスピーカーとして参加。 ・R5 (2022) 新指導要領の全面実施にむけて来年度パフォーマンス課題ウィークの導入 (6月、11月)。 <p>② 学校方針ふりかえり (中川教諭)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒「が」動く授業。授業公開ではABCのAが上手かった先生たちの授業では、勝手に生徒が動いていった。こうなってほしいBのためにAをどうするかが大きなポイント。 ・8:30 登校のポイントを使うときの生徒の姿に意義を感じた。8:30 登校の意味の共有が課題。ABCのポイントは、押し付けでなく生徒と一緒に考えること。 <p>③ リレートーク「コロナ禍の1年間で見えてきたもの」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校外学習ができず、目標設定に悩んだ。リサーチデーでは実際に行くことの大切さを知った。人が学ぶのは人から。言葉が返ってくる大切さを知ったからリモートにチャレンジできた。「自分のこと話そうかな」思う生徒がたくさん出て、一生懸命向き合ってくれた (園田教諭)。 ・年間の見通しが立たない不安の中での自分の伝え方が難しかった。今年1年、最も変わったのはどう評価するか考えるようになったこと (切山教諭)。 ・学校=生活調整メーカー。友人作りや生活リズムなどに休校の影響を感じた。顔を合わせて対話することが、思考や価値観を更新していくために必要。論コミでも、形式だけならオンラインでできるが、何を書くか考えること、友人との対話から生まれる学びは変わらず大切 (南教諭)。 ・コロナ禍だからこそ色々話せる場が課題研究にあった (亀田教諭)。 ・数学の解説動画を60時間分くらい作ってきたが、内容を教えるよりも motivationモチベーションを管理していくことが難しかった。教職員で仲がいいのでその声が出やすい職場を生かす時間を作りたい (林教諭)。 ・人権の集いの2回公演。3週間の実行委員のかかわりで、どんどん変わっていった (木村教諭)。 <p>④ 協議委員からのご意見、提言</p>			
提言内容・改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・外に出る、外からくることがどれだけ大切か。施設でSSTはできるが、出た瞬間に元通り。松原高校に来ることが、どれだけメンバーの社会性に寄与しているか。帰ってきたときの表情 			

が全然違う。

・「人を成長させる、人を安心させるのも人」、「学校が避難場所」。ここを抜かして前に行くことをコロナが止めている。この先、働くことにどうつなげるか。例えば、進学先で松高的でなくてガッカリして終わらない、場づくり、社会につながる学力。

・自分の隣にいる人の声に耳を傾ける。聞く人がいるから、語れる。よくこんな学校が地球上時存在してくれていた。20年経っても産社のポリシーが受け継がれている。

・今年の1年は特に不安があっただろう。そこに、寄り添ってやってもらった。支援生の子が卒業式で生き生きと語る姿。自然となるのではなくて、先生も生徒も自分が「こうしたい」があるから。